

宮城県気仙沼高校

探究学習

地域の課題と向き合う 探究学習を学校全体で推進し、 自ら考え行動する生徒を育成

変革のステップ

背景と課題

- 進路選択において主体性が乏しい生徒が多かった
- 進路の多様化に対応し、地域を「内」と「外」から見る視点を養う必要があった

実践内容

- 生徒や地域の課題を整理し、育てたい生徒像を議論 教師間で話し合い、育成を目指す9つの資質・能力を設定
- 1年生全員が対象の「地域社会研究」を導入 S G H (*1) の指定を受け、1年生全員が学校設定科目「地域社会研究」で探究学習に取り組む
- 生徒の様子から探究学習の指導を模索 生徒一人ひとりと向き合い、生徒の状況や考えに合わせて声かけ・働きかけを工夫しながら、探究学習の指導のあり方を体得

成果と展望

- 生徒の主体性が向上し、自主的な活動が活発に。卒業後に学びたいこと、進みたい道が明確になり、教科学習にも能動的に取り組むようになった
- 学校全体に探究学習を推進する機運が高まった

PROFILE



宮城県気仙沼高校と同県が浦高校が統合して開校。2018年度、同気仙沼西高校と統合し、市内唯一の県立普通科高校となった。防災教育や志教育、地方創生につながる学習、自主参加形式の英語学習など、多様な教育活動を展開。

設立 2005（平成 17）年

形態 全日制・定時制／普通科／共学

生徒数 1 学年約 240 人

2020 年度入試合格実績（現役のみ） 国公立大は、北海道教育大、弘前大、岩手大、東北大、宮城教育大、山形大、福島大、東京海洋大、宮城大などに 42 人が合格。私立大は、東北学院大、慶應義塾大、東京理科大、法政大、明治大、早稲田大などに延べ 182 人が合格。

住所 〒988-0051 宮城県気仙沼市常楽 130

電話 0226-24-3400

Web site <https://kesennuma-h.myswan.ed.jp>

学校でしかできない学びとして、 探究学習を教育活動の柱に

宮城県気仙沼高校は、2018年の同気仙沼西高校との統合に備えて、新たな学校づくりを進めてきた。地域の実情や生徒の課題を整理し、育てたい生徒像を語り合う中で、課題の1つに挙げたのが、進路選択において主体性が乏しい生徒が多いことだった。研究企画部 S G H 主任の鈴木悠生先生は、当時をこう振り返る。

「この地域には大学がなく、都市部から離れていることもあり、昔から生徒にとって大学は身近な存在ではありません。大学情報をインターネットなどで調べられるようになって、教師からの情報提供を待っただけの受け

*1 文部科学省のスーパーグローバルハイスクール。



身の生徒が多く、進路選択では、偏差値以外の尺度を持たない生徒や保護者が少なくありませんでした。また、本校には、進学などで地域を離れた後も『外』から地域に貢献する人材と、就職で地域に残ったり、Uターンしたりして、『内』から地域を支える人材の両者を

校長

狩野秀明

かの・ひであき

教職歴35年。同校に赴任して2年目。「教師が夢を語らず、誰が語るのか。全国に誇れる学校を、今いる先生方とつくりたい」

教頭

高瀬琢弥

たかせ・たくや

教職歴27年。同校に赴任して1年目。「生徒の心に火をつけ、地域復興の人材を育成し、地域とともにある学校を目指す」

主幹教諭、研究企画部長

小松代晃匡

こまつしろう・てるまさ

教職歴30年。同校に赴任して2年目。地理歴史・公民科。「創造性豊かで、高い志を持った人材を育てられるよう、日々精進したい」

進路指導部長

菅原裕行

すがわら・ひろゆき

教職歴25年。同校に赴任して3年目。数学科。「生徒が自分の成長を感じられるよう、進路指導を通してサポートしていきたい」

研究企画部SGH主任

鈴木悠生

すずき・ゆうせい

教職歴10年。同校に赴任して6年目。理科。「理想を抱くこと。生徒の、世界の未来に種をまく。よいものをみんなで」

研究企画部、地域社会研究担当

揚野耕平

あげの・こうへい

教職歴9年。同校に赴任して5年目。英語科。「生徒との対話を重視し、生徒が主体性を持って何事にも挑戦できる環境づくりを目指す」

育成する使命があります。地域を外と内から見る視点を育む必要性も感じていました」
そうした現状を踏まえた上で、変化し続ける社会や大学入試に対応することができる資質・能力をしっかりと育む必要があると考え、探究学習を教育活動の柱に据えたと、統合前から同校の教頭を務めていた狩野秀明校長は語る。
「生徒に、自ら情報を収集する経験を積ませたいと考えました。また、知識・技能は、学校外の学習でも習得できますが、答えが1つではない問いについて、生徒同士が話し合い、合意形成をしながら答えを見いだす探究学習は、学校でしかできません。統合後は学力や希望進路が一層多様化すると予想されましたが、だからこそ、そうした学びを学校全体で推進すべきだという結論に至りました」
身近な地域から課題を見いだし、地域と連携して研究に取り組む
同校は、全国の探究学習の先進校を視察した上で、自校における探究学習の検討を始めた。まず、育成を目指す9つの資質・能力を設定し、教育活動ごとに各資質・能力を育成する場面を示した「スモールステップ表」(図1)を作成。1年次は、全員が学校設定科目「地域社会研究」で、希望進路によって3つの類型に分かれる2年次以降は、「創造類型」が「課題研究Ⅰ・Ⅱ」、その他の類型は「総合的な学習の時間」で、探究学習を行うカリキュラムとした。そして、S

図1 育成を目指す9つの資質・能力と「スモールステップ表」(抜粋)

【育成を目指す資質・能力】 ①基礎的・基本的な知識・技能、②批判的思考力・科学的思考力、③総合的思考力・未来思考力、④語学力(英語力も含む)、⑤言語的コミュニケーション力、⑥情報活用能力、⑦多様性、⑧協働性、⑨行動力

育てる 資質・能力	基礎的・基本的な知識・技能	思考力	
		批判的思考力・科学的思考力	総合的思考力・未来思考力
事業名・事業内容	- 基盤となる精選された知識・技能 - 学ぶ力(学ぶ意義や学び方)の育成	合理的、客観的な情報や公平な判断に基づいて本質を見抜き、建設的・発展的に思考・判断する力	- 自然や社会システムを理解し、目的や課題を明らかにして、多面的・総合的に考える力 - 過去や現在を踏まえ、あるべき未来像を創造し、シミュレーションして計画する力
	①科学的探究の過程の理解 ①科学的探究の仕方学ぶ ①地域理解講座 ①発表会(ポスター)	①[海]海とのかかわり、地域の基本的な課題を理解する ①[課題設定]中学校での学習や予備調査・講義に基づいて地域課題を設定する ①[研究計画]具体的な研究計画	①[海]海とのかかわる地域課題について、教科横断的に知識を使い、科学的に研究する ①[課題設定]科学的に解決可能な課題を設定する ①[研究実行]科学的手法を理

「スモールステップ表」では、教育活動ごとに9つの資質・能力それぞれを育成する場面を明確化した。

*学校資料を基に編集部で作成。「スモールステップ表」の全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト(<https://berd.benesse.jp/>)からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

GHの指定を受けた16年度、探究学習をスタートさせた。その進め方を具体的に見ていく。
1年次の地域社会研究では、防災・産業・人間・文化・自然の5領域の中から1つを選び、同じ領域を選んだ生徒同士でグループを組み、地域に関するテーマを設定して研究する。まず、5月に行われる5領域の各専門家による講演で、地域の課題への理解を深める。生徒が本気で取り組むためには、実際の社会課題に触れること

が不可欠と考え、市役所や地元企業、震災の復興支援に携わるNPO法人などに講演を依頼した。

7月までに研究領域とテーマを決定。10月の中間発表会までの活動を「研究活動a」、中間発表会での指摘を踏まえたその後の活動を「研究活動b」とし、連携先の企業やNPO法人などを訪れて聞き取り調査を行ったり、東北大学や東北工業大学などを訪問して研究者からアドバイスを受けたりして、研究を深めていく。研究テーマは、「さんまの不漁の原因と改善」「仮設店舗の復興は順調なのか」などだ。

「地域全体で子どもを育てよう」という意識が、この地域には根づいており、復興に向けて、以前にも増して連携が強まっています。本校の多くの卒業生が地域で活躍しており、企業などに『内と外の両面から地域を支える人材を育てたい』という思いを伝えると、どこも連携を快諾してくれました」（鈴木先生）

1月の学年発表会では、各グループのポスターセッションを実施。連携先の市役所などの関係者に加え、保護者も交えた大勢の来場者を前に、生徒は堂々と発表し、質疑にも答える（写真）。

「発表内容を見ると、身近な地域から課題を見いだすことで、生徒の探究がより深まっていると感じます。毎年、異なる研究テーマが設定されており、気仙沼は学びの宝庫なのだ」と生徒も教師も実感しています（狩野校長）

2・3年次の探究学習は、1年次の地域社会研究を土台に、個人で取り組む。創造型の課



写真 学年発表会には、連携先の市役所などの関係者ら、大勢が来場。生徒たちは、それまでに学んだポスターセッションの技法を用いて、来場者の質疑にも臨機応変に対応していた。

題研究Ⅰ・Ⅱでは、SDGsの視点で地域の課題を設定して、その方策を探り、3年次にその成果を英語の論文にまとめ、ポスターセッションを行う。研究企画部長の小松代晃匡先生は、課題研究Ⅰ・Ⅱの指導方針を次のように語る。

「2・3年次は、大学の研究室とも連携して、より学術的な研究に取り組み、校外の発表会にも積極的に挑戦しています。地域の魅力も題材にしたスマホゲームの開発などを通じて地域活性化に取り組んだ19年度の2年生の2人が、『全国高校生マイプロジェクトアワード』（*2）の文部科学大臣賞を受賞するなど、成果も出ています」

生徒の活動に寄り添い、探究学習の指導のあり方を模索

18年度の気仙沼西高校との統合後、SGHの指定もあつて、学校の教育活動の軸として定着した探究学習だが、当初は、多くの教師が探究

学習の指導は未経験であり、職員会議で指導方針などを共有しても、「戸惑いや不安の声が多かった。そうした中で推進力となったのが、「分らないなら、生徒と一緒に学ぼう」という教師の姿勢だ。若手教師もベテラン教師も、生徒一人ひとりに向き合い、それぞれの状況に合わせた声かけや働きかけの内容と方法を考えた。そして徐々に探究学習の指導法を身につけていったと、進路指導部長の菅原裕行先生は振り返る。

「目の前の生徒を見て、『よい点に着目している』『こういう場面ですまざるのか』といった気づきを積み重ねるうちに、次第に機を捉えて生徒に声をかけられるようになりました。そうして引き出しが増えていくと、教師がどのように働きかければ、生徒からポジティブな反応が返ってくるのかが分かってきました。職員室では、各教師のそうした経験や学びを共有し、学校全体の財産としています」

評価の指針を明確に示したことも、指導の充実につながった。例えば、1年次の地域社会研究では、「各イベントでの評点」「研究活動a・bにおける自己評価と教師による評価」「学年発表会での全体評価」の3つの場面で、それぞれ評価の観点別に到達目標を示したルーブリックを作成した（図2）。それを生徒にも示し、自分で目標を設定して主体的に活動できるようにするとともに、自己評価の場を設けた。研究企画部の揚野耕平先生は、次のように説明する。

「段階的に到達目標を示したことは、自己

* 2 探究学習・マイプロジェクトに取り組んだ全国の高校生を対象に行われる学びの祭典。地域や学校、子どもや大人といった枠を超えて参加者が学び合う。

図2 1年次「地域社会研究」の「研究活動α・β」のルーブリック表（抜粋）

観点	5	4	3	2
課題設定 (a)	地域に関係のあるテーマを課題とし、問題の背景を総合的な視点で捉え、論点が明確である。	地域に関係のあるテーマを課題とし、問題の背景を部分的にしか捉えていないが、論点が明確である。	地域に関係のないテーマを課題とし、問題の背景を部分的にしか捉えていないが、論点が明確である。	地域に関係のないテーマを課題とし、問題の背景を調べておらず、論点が不明確である。
情報の内容 (a, b)	アンケートやインタビュー、フィールドワーク等から得られたオリジナルのデータも適切に処理・加工して使っている。	アンケートやインタビュー、フィールドワーク等から得られたオリジナルのデータを使っているが、処理・加工に不備が見られる。	他人が作成したデータを適切に選び、加工している。	他人が作成したデータを加工しているが、適切なデータではない。

評価の観点 a は、「地域課題を理解している。また、研究手法を身につけている（①知識・技能）」、b は、「批判的・科学的思考力を身につけている（②思考・判断・表現）」、c は、「主体的に解決しようとする態度を身につけている（③主体的に学習に取り組む態度）」としている。

* 学校資料を基に編集部で作成。「ルーブリック表」の全体は、ベネッセ教育総合研究所のウェブサイト (<https://berd.benesse.jp/>) からダウンロードできます。「HOME→教育情報→高校向け」をご覧ください。

肯定感が低かった生徒にとっても、自分なりに努力し、少しでもレベルが上がることで自信を持つきっかけになっていました。一方で、自分たちだけでは探究を進められないグループには、参考となりそうな書籍やウェブサイトを紹介したり、気づきを促す投げかけをしたりするなど、教師が伴走することを心がけています。学年発表会後、『頑張つてよかったです』と、晴れやかな表情を見せてくれる生徒に、大きな成長を感じています」

生徒のそうした変化が、学校全体の雰囲気を変えていったという。

「当初、学年発表会の準備は、担当の教師だけで行っていました。が、次第にほかの教師も集まり、椅子を並べるなど、協力してくれるようになりまし。そうした変化にも、探究学習が学校全体の取り組みになっていることが表れていると思います」（鈴木先生）

主体的に行動する生徒たち 校外で自主的な活動が活発に

探究学習に真剣に取り組んだ生徒には様々な変化が見られると、菅原先生は語る。

「探究学習で答えが1つではないテーマに向き合い、必死に情報を集め、考えをぶつけ合う経験を積むにつれ、『もつと知りたい』という意欲が高まり、『自分で行動を起こす』ことのやりがいを実感したのでしょう。大学についての情報収集を自ら行う生徒が増え、教科学習にも主体的に取り組むようになりました。また、志望校の入試で求められる力と自身の現状を捉えて、その差を埋めようと努力する姿もよく見られます。苦手の数学を頑張っている生徒の1人は、『探究学習での変容に比べたら大丈夫です』と笑っていました」

探究学習を通じて、大学で学びたい学問が決まったり、研究内容をアピールできる推薦・AO入試の受験を希望したりする生徒も増えています。その一方で、探究学習で積み重ねた経験が自

分の強みだと自覚できていない生徒もいる。

「入試前に自信を失い、相談にきた生徒に、探究学習の努力を振り返らせて励ますこともあります。面談以外にも、生徒が身につけた資質・能力を自覚できるような仕組みをつくるのが、今後の課題の1つです」（菅原先生）

生徒と地域とのかかわりも深まっている。18年度は、3年生の有志がクラウドファンディングで資金を集め、地域住民と交流イベントを実施。20年度は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けた臨時休業中に、2・3年生の有志が地域のNPO法人と連携し、オンラインで探究学習の成果を発信する「バーチャル文化祭」を開催した。高瀬琢弥教頭は、自ら必要なことを考え、行動している生徒に頼もしさを感じている。

「新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、地域の祭りが中止になったと聞き、自分たちにできることはないかと、オンラインでの発信を模索している生徒もいます。生徒の主体的な活動が、校内外に活気を生んでいます」

新型コロナウイルスの感染拡大による臨時休業が今後も懸念される中、同校はオンラインツールも活用しながら探究学習を進める考えだ。

「外部講師の講演などはオンラインで実施する予定ですが、対話や発表といったアウトプット活動は、実体験が一層大切になると考え、実施の方向で動いています。オンラインとオフラインの特性を見極めて使い分け、探究学習の充実に努めていきます」（揚野先生）